



JPFP Newsletter

国際人口問題議員懇談会（JPFP）事務局
公益財団法人アジア人口・開発協会（APDA）

2024年6月

セミナー「Well-beingの視点から考える『人口と開発』」

公益財団法人アジア人口・開発協会（APDA；JPFP事務局）は、2024年6月4日に、衆議院第一議員会館 国際会議室にて、セミナー「Well-beingの視点から考える『人口と開発』」を開催し、我が国において全世代の個々人の社会性と創造性を豊かにするための Well-being の在り方について鼎談並びに議論を行いました。また上川陽子外務大臣が、Well-being に関する日本の発信、世界的な視点、ポスト SDGs について特別講演を行いました。国会議員をはじめ、企業、メディア、有識者、学生等、対面で70名、オンラインで10名、総勢80名が参加しました。以下にセミナーの要旨をご紹介します。

【はじめに】

コロナ禍を経て、「身体的・精神的・社会的に良好な状態」と定義される Well-being の重要性への認識がますます高まり、国際機関をはじめ、Well-being の指標や施策、その社会経済的インパクトについての議論が国内外で重ねられています。



我が国においても、骨太の方針をはじめ、国・地方レベルにおいて Well-being に関する取り組みが進められているほか、企業や学術界においても関心の高まりとともに、活動が活発になっています。個々人の幸福度を表す Well-being の概念がここまで注目される背景には、我が国を取り巻く少子高齢化社会や人口

減などの大局的視点から、これからの日本の社会の在り方や、一人ひとりの生き方、働く意味を改めて見直す動きが高まりつつあることが考えられます。

【開会挨拶】

福田康夫 APDA 理事長・元内閣総理大臣は、SDGs のような開発問題も人口問題も、マクロの数字だけでなく、ミクロのいわば一人ひとりの人生の質、生活の問題としてとらえることの重要性を強調しました。今回のテーマにふさわしい方々に鼎談を引き受けていただいたことに感謝を述べ、本セミナーが、将来に向けてより良い政策形成に寄与できることを期待するとして、開会挨拶を締めくくりました。



福田康夫 元内閣総理大臣・
JPFP 名誉会長・APDA 理事長

【鼎談】

鼎談には、狩野光伸氏（岡山大学副理事・副学長・同大学大学院ヘルスシステム統合科学学域教授）、樋口ゆり子氏（京都大学大学院薬学研究科・薬学部教授）、乗竹亮治氏（日本医療政策機構理事／CEO）が登壇し、モデレーターは池上清子氏（APDA 常務理事）が務めました。

【質問Ⅰ】

—超高齢社会を迎えている日本において、高齢者が心身ともに健康で、社会と能動的に関わり続ける生き方をするために、最近のコロナ禍に対する各国の取り組みも踏まえつつ、日本においてどのような Well-being が重要になるのか？

樋口氏：コロナ対策の中で非常に難しかったことは、個人の価値観が大きく関わってくることである。生きてきた環境や国が違ったら価値観はさらに異なるので取組を決めるのは難しいだろう。特に、自分が何を幸せに思うのかという自分でも掴みどころのないことが関わってくる well-being の実現は非常に難しい問題だと感じる。

乗竹氏：コロナ禍で高齢者の命を守ったことは素晴らしいことだが、同時に、介護施設などでビニールの向こう側で生活してもらった。生物学的な命を伸ばすことのある「何のために生きているのか」「何のための命なのか」ということを社会全体で考えていくことも求められている。その点については、日本でも、もっと議論をしていく必要があるのではないかと感じる。

狩野氏：自分自身も行政の仕事をお手伝いする機会があるが、行政の仕事は、統計の結果を基に手を打っていくところがある。全体が見えないと誤ることも多いからである。しかし「統計的に正しい」内容は、多くの人に当てはまっても、全ての個人に当てはまるとは限らない。ある統計で「外れ値」に当たったとしても、個々人はれっきとした各個人である。「統計的に正しいこと」が必ずや各個人で幸せに繋がるとは限らない。「全体」と「個別」、このバランスを取っていくことが必要だと思う。



狩野 光伸氏
岡山大学副理事・副学長・
同大学大学院ヘルスシステム統合
科学学域教授

[質問2]

—若い人たちも「長生きしたい」と思えるような社会を創造するために、どのような取組が大切になってくるか？

樋口氏：私は、大学で研究や教育に携わっている中で、今の学生に、答えのない問に向かって立ち向かうことや、一緒に答えを探す過程や作業の重要性などを伝えたい。それらを学ぶ中で、自分自身の幸せや、社会の見方が個々の中に確立されて、新しい社会の創造に繋がるのではないかと思う。

乗竹氏：どう生きるか、どう学ぶかを上から定義するではなく、若い世代を含めて個々人が考え、積極的に発信してもらうことは非常に大事だと思う。コロナ禍を経て、ミシェル・フーコーがいう「生政治」は、一定程度、再考されても良いはずである。若い世代の声を聞くことは、日本の国家のために必要なプロセスだと思う。

狩野氏：統計的と先ほど言ったが、「皆に正しい」と思われていることの全てが、「自分にとっても正しい」わけではない。その結果、自分はどうしたらよいのかというのは、それぞれが考えた方がよいと思う。

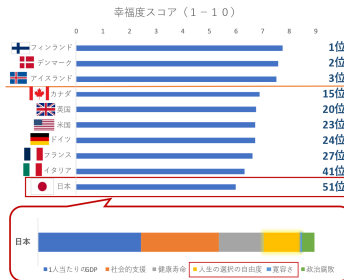
[質問3]

「The World Happiness Report 2024」によれば、日本の幸福度ランキングは143か国中51位、主要7か国の中では最下位という結果。さらに30歳以下を対象を絞ると、73位と順位がより大きく下回っている。中でも、「1人当たりのGDP」、「社会的支援」、「健康寿命」、「人生の選択の自由度」、「寛容さ」、「腐敗の少なさ」という6つの変数の内、「人生の選択の自由度」と「寛容さ」において日本のスコアが低いことが分かった。



日本はG7の中でも幸福度スコアが低く、中でも「人生の選択の自由度」、「寛容性」を高める余地が多くある

国連、オックスフォード大学、Gallupが共同調査を行い、公表している「The World Happiness Report 2024」によれば、日本の幸福度ランキングは、143か国中51位、主要7か国のなかでは最下位という結果となっている。さらに、30歳以下を対象を絞ると、73位とさらに順位が下回る。スコア算出元の6つの変数の内、「人生の選択の自由度」と「寛容さ」において日本のスコアが低いことが分かった。



※World Happiness Report, 「Happiness of the younger, the older, and those in between」
[https://worldhappiness.report/nd/2024/happiness-of-the-younger-the-older-and-those-in-between/working-of-happiness-2023-2024\(202405-14\)](https://worldhappiness.report/nd/2024/happiness-of-the-younger-the-older-and-those-in-between/working-of-happiness-2023-2024(202405-14))

—日本の次世代が「人生の選択の自由」をより実感できる社会の実現に向けて、現役世代に期待される役割とは？

乗竹氏：見せかけの自由や近代的・現代的な意味での自由だけで、議論しないほうが良いかと思う。例えば、家業を継ぐことは、職業の選択肢がない、という議論で終わるのではなく、それをやることへのプライドや、単に東京で良い大学を出て良い会社に入ることだけが人生の選択、ということではないのだ、ということ、広い国民目線でもう一度議論しておく必要があると思う。



乗竹 亮治氏
日本医療政策機構理事／CEO

狩野氏：どういう能力セットが全体では必要なのか、自分はその中でどの要素は持っている、どの要素は他の人に頼む必要があるのか、ということ、もう一回見直すことができると、乗竹さんの言う国民目線で見直すことに繋がるのかなという気がしている。

樋口氏：乗竹さんの話を聞き、自由ってなんなのだろう？と改めて考えさせられた。自由というのは、たくさん選択肢から選べるだけでなく、ある程度の制限のある選択肢から選ぶ場合であっても、個人が納得して選んでいるかどうかという要素もすごく重要であると感じる。

[質問4]

—日本の次世代が「寛容さ」をより実感できる社会の実現に向けて、現役世代に期待される役割とは？

狩野氏：我々住んでいる社会では、優劣の決め方、できる・できないという場合の物差しが、単一的だと思ふことがある。もっと多様な軸がありえるのではないか。様々な人がいる中で、

社会として、うまくデコボコがあり平らになる、といったセンスが生まれてくると良いのかなと思う時がある。

樋口氏：デコボコがあることに気づくためには、まず自分が自分を知ることが大事なのかなと思う。自分自身のことを分かっているなければ、人とのデコボコが分からない。おそらく若い時に、色々な難しい問題に立ち向かう中で自分自身に向き合う、あるいは友達同士の何気ない日々の中で友達を通して自分を見つめることで客観視できるようになるのではないかなと思う。



樋口 ゆり子氏
京都大学大学院薬学研究所・
薬学部教授

乗竹氏：一人ひとりの個人の自由と幸福というのを、成熟した市民社会として追い求める必要があると思う。個人の幸福を認め合う社会が寛容主義に繋がるのではないかなと感じる。

【上川外務大臣 特別講演】



上川陽子外務大臣

外務省 HP：

[セミナー「Well-being の視点から考える『人口と開発』」での上川外務大臣の講演](#)

[上川外務大臣による講演 \(PDF\)](#)

【意見交換】



牧島かれん衆議院議員

牧島かれん衆議院議員：高齢者に関しては、生き甲斐があるかどうかという「Ikigai」が、日本から海外にも発信できるコンセプトなのではないかなと考える。それはコミュニティ等の中での担い手の様なものかもしれないが、仕事とはまた違う役割が、負担ではなく、喜びに、人生の誇りになると思う。鼎談者の皆様は、どう考えるか？

乗竹氏：「Ikigai」は自身も輸出できる概念と聞いており、多分30年くらいかけて世界の日本に対する見方が変わってきたのだと思う。仕事でもコミュニティでも何かしらの形で社会と繋がっているということが、実は健康長寿社会の根本だったとわかり、パラダイムシフトが起きたのだと思う。その時に、まさに「Ikigai」を輸出していこうといった流れが生まれてきていると思うので、これは改めて日本の健康長寿を達成した我々だからこそ外に発信できるコンテンツなのだろうと感じる。



仁木博文衆議院議員

仁木博文衆議院議員：今日テーマは、人生は有限であり、有限である中で、様々な選択肢に対して結果はもちろん達成されるのが一番良いが、挑戦できることが幸せに繋がるのではないかと感じた。それがWell-beingの大きな柱ではないかと感じた。その上で、1つのデータではWell-beingの指標にすることは難しいという話もあったが、データの在り方についてどう思うか？

樋口氏：データはあくまで説明するためのものであると考える。研究の場合も、データの前には philosophy があり、philosophy を説明するためのデータである。従って、データの役割を理解し、データ（数字）を多角的にみてきちんと解釈し、上手く次に繋げて使っていくことが大切だと思う。

清水嘉与子元環境庁長官：30年前からAPDAの活動に参加しており、Well-beingの話が取り上げられることに感激している。そのような時代になったのだと感じた。本当に人生自由のない時代に生きてきて、選ぶことが困っているくらいに自由がありふれてきていることが嬉しい。ただ、先ほどのデータを見てショックを受けている。日本には長生きするのが嫌という人がこんなに大勢いる。我々の世代では、長生きしなければ良かったと言う人はあまりいないと思う。そのため、このデータを見ると、何か色々と問題があるのではないかと心配になる。



清水嘉与子元環境庁長官

山本太郎長崎大学名誉教授：患者一人ひとりにはそれぞれ多様な物語があり、エビデンスベースの医療も必要だが、それだけではなく、一人ひとりの価値に基づいたバリューベースで医療をどう提供できるかということが、重要なかもしれないと最近思い始めた。人口問題や Well-being 考えるにあたり、今日の話聞き、マクロの視点から人口問題を見ていくと、国家の安全保障とか経済の問題になるが、もっとバリュー（価値）に戻した人口問題として考えると、一人ひとりの幸せや Well-being というところに帰着すると思う。



山本太郎 長崎大学名誉教授



阿部俊子 文部科学副大臣

阿部俊子文部科学副大臣：今日若い方がいらしているので質問したいと思う。1つ目の質問、長生きしたいと思う人、手を挙げて下さい。（数名手を挙げる。）2つ目の質問、自分のことが好きだと思う人、手を挙げて下さい。（数名手を挙げる。）私自身は、自分が好きだということと、自分の好きなことをやっていくことができるという社会が大切だと思っている。長生きしたくないと思った人はなぜなのか、後でこっそり教えてほしい。

【まとめ】

乗竹氏：1番最初に福田元総理がおっしゃったマクロとミクロという議論で、もう1回ミクロ単位で人間の営みというものを考え直し、それを施策に実現していく、置き換えていくことが、特に医療界においては改めて求められていると強く感じた。また、阿部先生の質問であまり手が上がらなかったこと、改めて考えさせられる。ただ、若者が青春を謳歌することと長生きへの希望は、もしかしたら一致しないのかもしれない。

樋口氏：言葉の持つ意味は、人によって受け止め方が違うと感じた。例えば自由という言葉の意味を今回私自身も考えさせられた。また、幸せも個々に違うということを少し考えた。Well-being は、そのような多様な受け止め方の上に成り立ち、一人ひとり違うと思うので、それを政策に落とし込んでいく時に、どうしても立ち塞がるのが多くの人を対象とすることに起因する限界なのかなと感じた。

狩野氏：Well-being を調べると、GDP が上がったら上がるのではないか、という仮説に対して、そんなことはありませんというデータが出てくる。Beyond GDP だ、と言うが、何はお金でなんとかなるが、何はならないのか、というところについての目線が必要ではないか。

池上氏：今日、国会議員の皆様の話を伺っていて、改めて私たち個人の選択の自由、チョイスというのが非常に重要であると感じた。寛容という言葉が上から目線だという話もあり、確かにそのような点はあるが、心を広く持って相手を認めるとい社会を作っていくことで、次の世代を担う人たちにも、幸せだ、生きていてよかった、長生きしたいという社会を作っていけると良いなと感じた。これから少しずつ政策提言に向け、Well-being の議論を深めていきたいと思う。



池上清子 APDA 常務理事

JFPF

国際人口問題議員懇談会（JFPF）は、1974年に設立された世界で最も長い歴史を持つ人口・開発問題に関する超党派議連です。JFPFは、APDAと一体となって、人口・開発に関する議員ネットワークを作り、多様な知見や経験を共有し、具体的な成果につなげてきました。

[詳しくはこちら](#)

APDA

公益財団法人アジア人口・開発協会（APDA）は、1982年の設立以来、JFPFの事務局を務めています。

[詳しくはこちら](#)

本ニュースレターは、国際家族計画連盟（IPPF）並びに賛助会員の方々のご支援を受けて発行しています。

JFPFご入会を希望される場合は、apda@apda.jpまでご連絡下さいますようお願い申し上げます。



♥ 寄附・賛助金のお願い

APDAは「紺綬褒章」の公益団体に認定されています。紺綬褒章は、認定された公益法人等に公益のために私財を寄附された個人や法人に授与されます。

[DONATE NOW](#)

国際人口問題議員懇談会（JFPF）事務局

公益財団法人アジア人口・開発協会（APDA）

〒105-0003東京都港区西新橋2-19-5-8F

TEL: 03-5405-8844 FAX: 03-5405-8845

E-mail: apda@apda.jp Website: <https://www.apda.jp/>

【編集責任：APDA】